

短い鉛筆

長く使って

最後の最後まで使いきってほしい——。大阪にある

プラスチック小型鉛筆削り器の専門メーカーが来年1月、短くなった鉛筆を捨てることなく、別の鉛筆と継ぎ足して使える「つなぐ鉛筆削り器」の発売を予定している。同23日からパリで開かれる国際見本市に出品し、「日本人の『もったいない』の精神を伝えたい」と意気込む。

1933年創業の「中島重久堂」(大阪府松原市、従業員14人)。年間約60万個の小型鉛筆削り器を製造し、国内シェア(占有

大阪のメーカー「つなぐ削り器」

率)は約8割に上る。

新商品は円筒形(直径4

・5㎜、高さ7㎜)で、削

り穴の一つは短くなった鉛

筆の後ろ側に穴を開ける。

もう一つは別の鉛筆の先を

凸状に削る。この2本を差

し込んで接着剤で補強すれば

一本の鉛筆として使える。

継ぎ目も問題なく削れる。

もともとは、北陸地方の



来月発売予定の「つなぐ鉛筆削り器」。2本の鉛筆を1本にできる

「もったいない」PR

発明家の男性が約5年前、

「短くなった鉛筆を捨てる

のはもったいない」と、こ

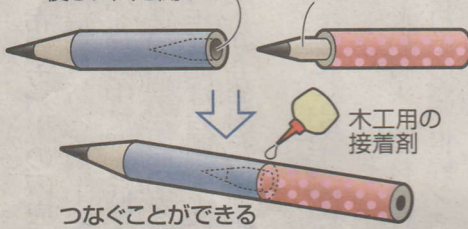
の仕組みの削り器を開発し

特許を取得。受注生産して

きたが、手作りのため1日

先を特殊な形に削る

鉛筆をつなぐ仕組み
後ろに穴を開ける



つなぐことができる

1個しかできなかった。

「たくさん作って、世界

に広めてもらえないか」。

男性から同社に電話があっ

たのは2年前。中島潤也社

長(46)はその熱心さと、ア

イデアに驚いた。

商品化へ向けて試行錯誤

を重ね、今夏、インター

ネット上で概要を発表。

「鉛筆を捨てるのがずつ

と気になっていった。子ど

もと一緒に使いたい」とい

った声が寄せられていると

いう。

中島社長は「物を大事に

する心を育んでもらえれ

ば」と期待を込める。予

定価格は1500円台(税

抜き)。同社ホームページ

(<http://www.njk-brand.co.jp/>)を通じて販売

する。

す。